ふるさと探訪

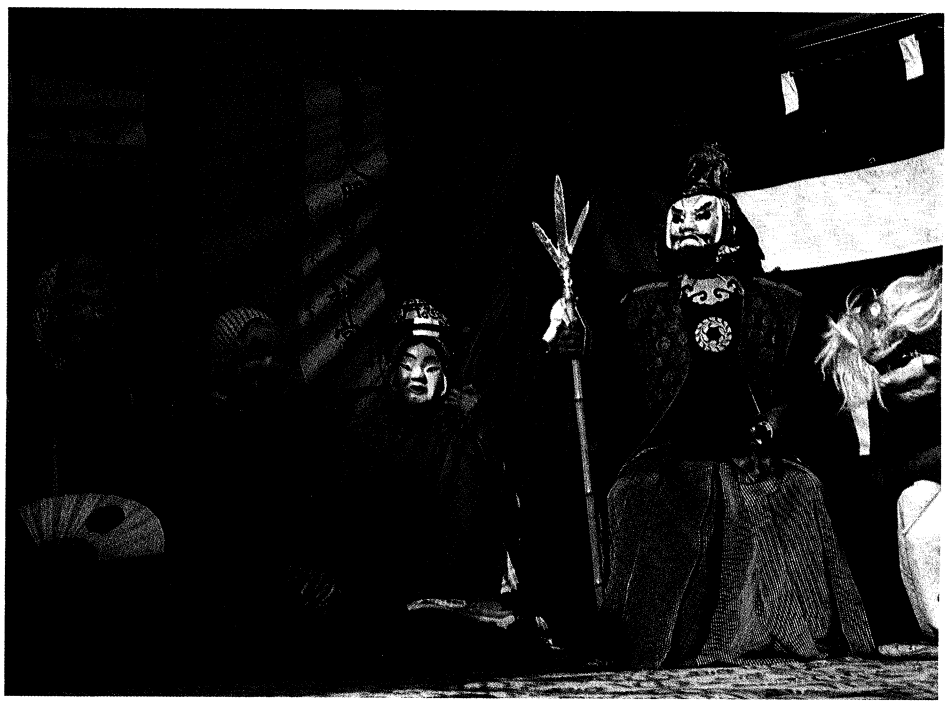
塩崎の七福神（白沢）

白沢村白岩字塩崎の八田内地区に伝わる祝福芸で、毎年一月七日夜に戸ごとにめぐって行われています。

踊りは、まず稲荷の導きで七福神が次々と舞込み、それぞれ座に着くと道化が二人出ておどけたしぐさでマブシを織り、養蚕の安全を祈ります。

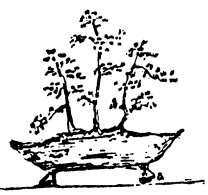
このあと少年少女による美しい手踊りが続きます。

お正月にふさわしい華やかな芸能で地方色も濃く、全国的にもめずらしいものです。



所在地　安達郡白沢村白岩字塩崎

あとがき



○雪どけのつららが、古い木造校舎の廂に林立している。やわらいだ陽光を頑に拒んだ寒気が、頬に痛い。……送辞がよまれ、答辞がのべられるころになると、涙が一堂を満たす。音楽の老教師が、緊張した面持ちでオルガンの鍵に指を進める。弾きなれたはずの音色がなぜか重い。メロディにひきずられるように、涙声があとを追う。そこには、さきほどまでの凜乎さにかわって感情の潤いだけが存在する。曲名は、「蛍の光」「仰げば尊し」。遠い昔の卒業式の想い出である。そしていま、また「わかれ」の季節がやってきた。

○演歌にも、「わかれ」に「なみだ」はつきものでなくなったという。「わかれ」は所詮、あたらしいものへの出会いであってみれば、それでいいとも思う。だが、なにかが欠けているのも事実である。失われたものが、「こころ」でないようにと願う。

○「さようなら」そして、「こんにちは」　（ひ）